

# 王陵の地域史研究

～飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅳ～

2010

## 例 言

- 1、この調査は「飛鳥地域の地域史研究」の一環として行った測量調査である。調査地は以下の通りである。
  - ・中尾山古墳 奈良県高市郡明日香村大字平田小字中尾山670-2、670-3番地他
  - ・豊年橋石碑 奈良県高市郡明日香村大字越・平田
- 2、測量調査に際しては、古墳の土地所有者の各位にご理解あるご協力をいただき、順調に進行、完了したことに深謝の意を表したい。また調査・資料収集等に際してご尽力を賜った関係各位に感謝の意を表します。(五十音順・敬称略)  
相原嘉之、猪熊兼勝、上田俊和、奥田 尚、河上邦彦、辰巳弘夫、辰巳月美、長谷川透、廣瀬 覚、平井康友、米田文孝、国营飛鳥歴史公園事務所
- 3、遺跡分布図は、国土地理院発行の二万五千分の一「畝傍」と奈良国立文化財研究所発行の「越」(1:1000)を使用した。
- 4、本書の執筆は西光慎治、辰巳俊輔があたり、文責は各文末に示した。
- 5、関係書類・図面等は西光慎治が保管している。
- 6、本書の編集は西光慎治が担当した。

## 目 次

例言 目次 .....	(34)
第1章 調査に至る経緯と目的 .....	西光慎治 (35)
第2章 飛鳥地域の測量調査 .....	(36)
第1節 地理的・歴史的環境 .....	西光慎治 (36)
第2節 中尾山古墳測量調査報告 .....	辰巳俊輔・西光慎治 (40)
1、はじめに .....	(40)
2、測量調査報告 .....	(46)
第3節 豊年橋石碑実測調査報告 .....	西光慎治 (47)
1、はじめに .....	(47)
2、実測調査報告 .....	(47)
第3章 総括 .....	西光慎治 (50)

## 挿図目次

第1図：明日香村周辺地質図(武久1979)	第8図：中尾山古墳 墳丘測量図(1:200)
第2図：飛鳥地域周辺遺跡分布図(1:25000)	第9図：豊年橋位置図(明治41年・1908年)
第3図：中尾山古墳位置図(1:1000)	第10図：豊年橋位置図(『聖蹟圖志』嘉永7年・1854年)
第4図：中尾山古墳周辺地籍図(1:1000)	第11図：豊年橋位置図(1:1000)
第5図：中尾山古墳位置図(明治41年・1908年)	第12図：旧豊年橋転用石碑実測図
第6図：『大和國古墳墓取調書』 (明治26年・1893年)	
第7図：『奈良縣史蹟勝地調査會報告 第二回』 (大正3年・1914年)	

## 第1章 調査に至る経緯と目的

飛鳥地域には多くの後・終末期古墳が分布していることは周知のことである。しかし未だ資料化されていないものも少なくない。こういった中、1982（昭和57）年以降、奈良県橿原考古学研究所や関西大学考古学研究室等によってキトラ古墳をはじめ牽牛子塚古墳や岩屋山古墳、塚本古墳などの測量調査が実施されている。こういった測量調査は基礎資料の資料化として地域史研究にとって重要な役割を担っていることはいうまでもない。

今回の調査は筆者が飛鳥と周辺地域の地域史像の解明に向けて取り組んでいる「飛鳥地域の地域史研究」の一環として企画し、土地所有者のご厚意・ご協力のもと測量調査・踏査を実施したものである。

調査は通常勤務に支障のないことを期したため、休日や年末・年始を利用した断続的な調査となった。調査期間は平成21年8月～平成22年1月にかけてのべ8日間行った。

（西光慎治）

### 【調査体制】

調査体制は以下の通りである。

	中尾山古墳	豊年橋石碑
担当者	西光慎治	西光慎治
調査員	辰巳俊輔（関西大学文学部考古学研究室）	辰巳俊輔（関西大学文学部考古学研究室）

### 【見学会の開催】

参加者を中心に測量調査の深化と比較検討を行うため、見学会を実施した。見学した古墳は以下の通りである。

赤坂天王山古墳、岩屋山古墳、打上古墳、カヅマヤマ古墳、カンジョ古墳、艸墓古墳、権現堂古墳、小谷古墳、菖蒲池古墳、新宮山古墳、谷首古墳、谷脇古墳、東明神古墳、塚本古墳、花山西塚古墳、花山東塚古墳、真弓鎌子塚古墳、マルコ山古墳、文殊院西古墳、文殊院東古墳

## 第2章 飛鳥地域の測量調査

### 第1節 地理的・歴史的環境

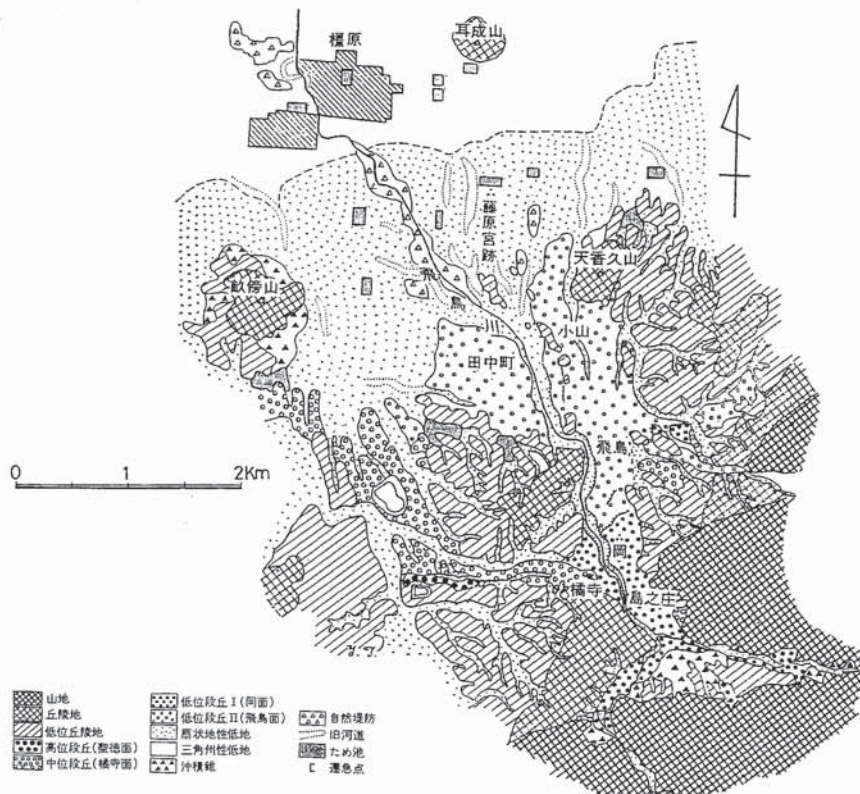
#### 【地理的環境】

明日香村は奈良盆地の南端に位置しており、背後には龍門山地が連なっている。龍門山地は奈良盆地と吉野山地を二分する位置にあり、中央構造線にそって吉野川が西流している。吉野川は下流域の和歌山県に入ると紀ノ川と称されている。龍門山地は奈良県のほぼ中央を東西に伸びており、奈良盆地と吉野山地とを繋ぐ幹線道は現在では芦原峠（芦原トンネル）となっているが古代では下ツ道から続く、巨勢路（紀路）や宮滝へと続く芋ヶ峠がありこれらの幹線道は村内を貫いており交通の要衝であったことが窺える。龍門山地は龍門岳（904m）を主峰にして、北に熊ヶ岳（904m）、経ヶ塚山（889m）、音羽山（801m）が連なり、東には多武峰の御破裂山（619m）を、西に高取山（583m）を配している。明日香村は御破裂山、高取山から派生した樹枝状に伸びた低位丘陵に抱かれた地域に位置している。

明日香村内の主要河川は南東から村内を縦断するように一級河川の飛鳥川が、西には高取川があり、それぞれ北流している。飛鳥川は多武峰と高取山から連なる芋ヶ峠、竜在峠付近に源を発している。途中、冬野川や唯称寺川と合流し、甘樫丘の東方で流れを北西に屈曲させ北流を続けていく。一方、高取川には桧前盆地を流れる桧前川が注ぎ込んでいる。

桧前盆地は標高100mの等高線に囲まれた1km四方の小氾濫原の支谷に形成されており、西側には幹線道の下ツ道が接している。高取川の西方にある貝吹山から伸びる尾根筋の裾部には高市郡と葛城郡との郡界となる曾我川が北流しており、大字寺崎付近で越峠付近から伸びる前川が曾我川に流れ込んでいる。

（西光慎治）



第1図 明日香村周辺地質図（武久1979）

## 【歴史的環境】

### 〈縄文時代〉

明日香村では飛鳥川や高取川流域を中心として縄文時代から人類の生活の営みを知ることができる。高取川流域では縄文時代草創期の有茎尖頭器が出土した桧前脇田遺跡をはじめとして、飛鳥川流域では飛鳥池遺跡で草創期の有茎尖頭器と木の葉形尖頭器が出土している。中期～晩期にかけては稲淵ムガンダ遺跡・坂田寺下層遺跡・鳥庄遺跡・飛鳥京下層遺跡・大官大寺下層遺跡等が存在し、集石遺構や竪穴式住居、土器棺などが検出されている。

### 〈弥生時代〉

弥生時代になると飛鳥川流域では飛鳥京下層遺跡（岡遺跡）（前期～後期）・山田道遺跡（中期）があり、鳥庄遺跡では中期の多角形プランを有した竪穴住居が検出されている。冬野川の上流域でV様式系甕が出土したとされており、周辺に集落が存在していた可能性がある。高取川流域では御園アライ遺跡（中期）で土坑などが検出されている。

### 〈古墳時代〉

古墳時代ではまとまった遺跡は確認されていないが坂田寺下層遺跡や鳥庄遺跡、飛鳥京下層遺跡、水落遺跡、大官大寺下層遺跡等で6世紀前半～後半にかけての竪穴住居等が数棟検出されている。また東橋遺跡や川原寺下層遺跡、甘樫丘東麓遺跡、古宮遺跡、上ノ井手遺跡、山田道下層遺跡等でも竪穴住居や韓式系土器、滑石製玉類や土坑などが検出されている。高取川流域では御園アライ遺跡や桧前タバタ遺跡で竪穴式住居や古式土師器が検出されている。飛鳥川流域では右岸の段丘上を中心に縄文時代から人々が生活を営んできたが、6世紀末に飛鳥真神原に飛鳥寺が建立されて以降、寺院や宮殿が立ち並ぶようになる。飛鳥京周辺でも酒船石遺跡や雷丘、甘樫丘等で形象埴輪や普通円筒が出土しており、宮殿造営に伴って削平、消滅した古墳が多く存在していたことがわかる。更に飛鳥川の支流、冬野川流域には横穴式石室を主体とした約200基を超える細川谷古墳群が展開している。群内には緑泥石片岩の箱式石棺を内蔵した堂ノ前塚古墳や戒成組田古墳、穹窿状横穴式石室を有しミニチュア炊飯具等が出土した上5号墳、石材の一部に切石を用いた打上古墳など特徴のある古墳が多く分布している。また冬野川下流域には一辺約60mの方墳の石舞台古墳が存在し、対岸には都塚古墳や塚本古墳など家形石棺を有した6世紀後半から7世紀初頭にかけての古墳が築かれている。その他、寺川の支流、中の川の上流部には八釣・東山古墳群が展開しており、多くの馬具やガラス玉等が出土している。また曾我川の支流、前川の上流部では6世紀中頃に造営された真弓鎌子塚古墳がある。真弓鎌子塚古墳は玄室の北側に奥室を有し、玄室床面積は石舞台古墳をしのぶ規模である。石室内からはミニチュア炊飯具をはじめ銀象嵌刀装具、玉類、金銅製馬具、そして獣面を模った獣面飾金具などが出土している。前川の右岸ではミニチュア炊飯具等が出土した与楽古墳群など貝吹山（標高210m）の南側斜面には数百基の古墳が展開し、左岸にあるスズミ1号墳からもミニチュア炊飯具が出土するなど、前川を中心とした周辺の古墳群は東漢氏の奥津城と考えられている。また高取川流域では方格規矩鏡や四獣形鏡等が出土した向山1号墳やミニチュア炊飯具や釵子が出土した坂ノ山古墳群、銀製釧などが出土した稲村山古墳、カイワラ1・2号墳などが点在している。隣接してある観音寺遺跡や清水谷遺跡、薩摩遺跡からは大壁建物やオンドル遺構、方形池が検出されるなど檜隈地域周辺には多くの渡来系氏族が蕃居していたことが窺える。



1. 中尾山古墳 2. 豊年橋 3. 小谷古墳 4. 益田岩船 5. 沼山古墳 6. 与楽古墳群 7. 真弓鑿子塚古墳 8. 牽牛子塚古墳
9. 岩屋山古墳 10. スズミ1号墳 11. スズミ2号墳 12. カツヤマ古墳 13. マルコ山古墳 14. 真弓テラノメ古墳 15. 佐田遺跡
16. 束明神古墳 17. 佐田2号墳 18. 佐田1号墳 19. 出口山古墳 20. 森カシタニ遺跡 21. 森カシタニ塚古墳 22. 向山1号墳
23. 薩摩遺跡 24. 松山呑谷古墳 25. 清水谷遺跡 26. ホラント遺跡 27. 阿部山廃寺 28. 阿部山遺跡群 29. 福村山古墳
30. 観音寺遺跡 31. キトラ古墳 32. 栗原寺跡 33. 検前門田遺跡 34. 檜前遺跡群 35. 檜隈寺跡 36. 坂ノ山古墳群 37. 検前上山遺跡
38. 御園チシャイ遺跡・御園アライ遺跡 39. 塚穴古墳 40. 高松塚古墳 41. 火振山古墳 42. 平田キタガワ遺跡 43. 梅山古墳
44. カナヅカ古墳 45. 鬼ノ俎・雪隠古墳 46. 野口王墓古墳 47. 定林寺跡 48. 西橋遺跡 49. 龜石 50. 川原下ノ茶屋遺跡
51. 葛蒲池古墳 52. 五条野宮ヶ原1・2号墳 53. 五条野向イ古墳 54. 五条野城脇古墳 55. 五条野内垣内古墳 56. 植山古墳
57. 五条野丸山古墳 58. 軽寺跡 59. 石川精舎 60. 田中廃寺 61. 和田廃寺 62. 雷丘北方遺跡 63. 大官大寺跡 64. カサヤ塚古墳
65. 庚申塚古墳 66. 山田寺跡 67. 上の井手遺跡 68. 奥山リウケ遺跡 69. 奥山久米寺跡 70. 雷丘東方遺跡 71. 豊浦寺跡
72. 石神遺跡 73. 飛鳥水落遺跡 74. 飛鳥寺跡 75. 飛鳥東垣内遺跡 76. 竹田遺跡 77. 小原宮ノウシロ遺跡 78. 八釣東山古墳群
79. 東山マキド遺跡 80. 金鳥塚古墳 81. 飛鳥池工房遺跡 82. 酒船石遺跡 83. 飛鳥京跡 84. 飛鳥京跡苑池遺構 85. 甘樫丘東麓遺跡
86. 川原寺裏山遺跡 87. 川原寺跡 88. 橋寺跡 89. 東橋遺跡 90. 鳥庄遺跡 91. 石舞台古墳 92. 馬場頭古墳群 93. 打上古墳
94. 都塚古墳 95. 戎成組田古墳 96. 坂田寺跡 97. 飛鳥福淵宮殿遺跡 98. 塚本古墳 99. 朝風廃寺 100. 福淵ムカダ遺跡

第2図 飛鳥地域周辺遺跡分布図 (1:25000)

### 〈飛鳥時代〉

7世紀に入ると高取川左岸（真弓丘陵）から右岸（桧前盆地）にかけて多くの終末期古墳が築かれるようになる。真弓丘陵では精美な横穴式石室を有した岩屋山古墳や凝灰岩の巨石を削り貫いた牽牛子塚古墳があり、石室内からは大量の夾紵棺片とともに七宝亀甲形座金具や玉類が出土している。更に南方には多角形を呈したマルコ山古墳や凝灰岩の切石を積み上げた東明神古墳、骨蔵器を内蔵したとされる出口山古墳などが点在している。また結晶片岩の磚積石室で棺台を有したカツマヤマ古墳などが点在している。桧前盆地になると梅山古墳からカナヅカ古墳、鬼の俎・雪隠古墳、野口王墓古墳が東西に並んで築かれており、南方には八角形墳で火葬墓の中尾山古墳や極彩色の壁画で有名な高松塚古墳が存在している。更に高松塚古墳から1.5km南には四神図や天文図、十二支像が確認されたキトラ古墳がある。飛鳥盆地では蘇我氏の氏寺の飛鳥寺をはじめ、豊浦寺や山田寺、奥山久米寺、坂田寺、定林寺などの多くの古代寺院が築かれる。国家寺院としては百濟大寺（吉備池廃寺）が造営され、その法灯は高市大寺、大官大寺、奈良大安寺へと繋がれていく。天皇家の寺院としては齊明天皇の菩提を弔うために川原宮の跡地に川原寺が造営される。また宮殿も乙巳の変の舞台となった飛鳥板蓋宮や齊明天皇の後飛鳥岡本宮、天武天皇の飛鳥浄御原宮や苑池などが造営される。これらの宮殿に近接して酒船石遺跡や飛鳥池遺跡がある。酒船石遺跡では酒船石を中心に丘陵を藤原層群豊田累層の凝灰岩質細粒砂岩を使用した石垣が約700mにわたって巡っており、また丘陵の北側裾部からは亀形石造物を中心とした導水施設と石敷き広場が検出されるなど二槻宮との関連が注目されている。また石上山石を運んだ狂心渠と考えられる幅約10mの運河跡が飛鳥東垣内遺跡で検出されている。この運河の上流に約1kmにわたって続いており、上流部には飛鳥池遺跡が存在する。飛鳥池遺跡は7～8世紀にかけての官営工房で炉跡や石組み溝、掘立柱建物の遺構の他、金属・ガラス玉・鋳型・大量の木簡、また鋳造貨幣では和同開珎より遡るとされる「富本銭」が出土している。この他、飛鳥東方の丘陵地には小原シウロ遺跡や東山マキド遺跡、竹田遺跡があり、7世紀代の掘立柱建物群が検出されている。また橋寺西方にある西橋遺跡では7世紀後半～末にかけての庇付掘立柱建物や大量の木簡が出土している。宮殿域の中心部から離れた桧前盆地では東漢氏の氏寺とされる檜隈寺や吳原寺等の寺院が建立され、周辺部には7世紀代の掘立柱建物群が検出された檜前遺跡群などがある。

### 〈奈良時代以降〉

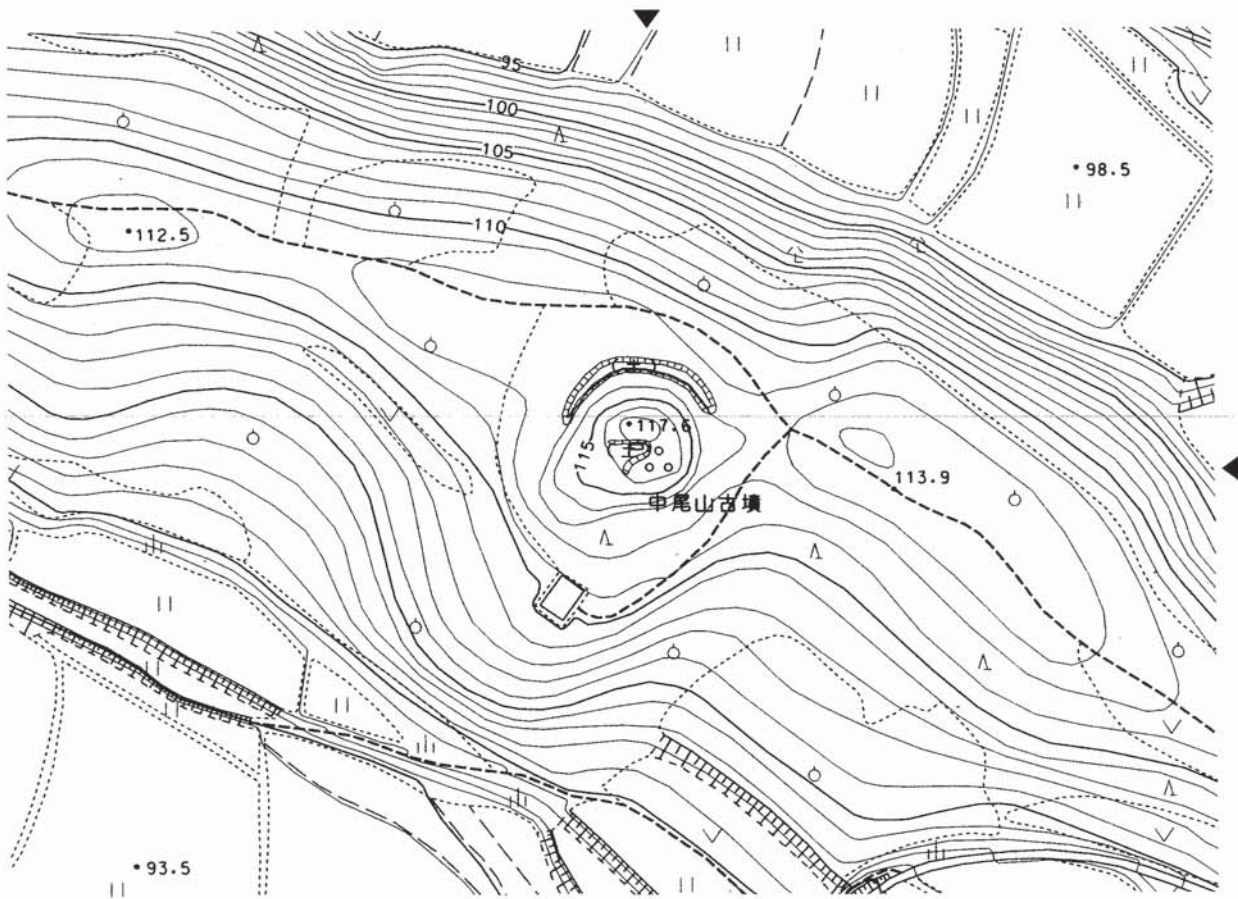
西暦694年、政治の舞台は飛鳥京から藤原京へ、更に藤原京から平城京に移るようになると飛鳥地域では顕著な遺構はあまり認められなくなる。一方、雷丘東方遺跡では井戸枠の年輪年代から淳仁朝の「小治田宮」が奈良から平安時代にかけて存続していたことも明らかとなっている。阿部山遺跡群では12～13世紀の一辺約4mの墳丘をもつ木棺墓が検出されており、棺内から龍泉窯系青磁椀等が出土している。中世以降になると南北朝期に越智氏が越智城を構え、飛鳥周辺にも貝吹山城や佐田城が築かれるようになる。また越智氏は高取山に逃げ城的な存在の高取城を築き、その後本多氏、植村氏によって改修を重ねながら高取藩の居城として幕末まで存続していく。高取城の石垣の一部には古墳の石材を転用しており、この時期飛鳥地域の後・終末期古墳が破壊されていたことが推測できる。飛鳥盆地には砦的性格をもつ奥山城や飛鳥城、雷城や岡城、そして野口城や貝吹城、観音寺城が築かれるようになる。近世になると西国七番札所である岡寺（龍蓋寺）の門前町が賑わいをみせ、本居宣長も岡の薬屋で一夜を過ごしており、今日もなお古い町並みは往時を偲ばせてくれる。（西光慎治）

## 第2節 中尾山古墳測量調査報告

### 1、はじめに

中尾山古墳は奈良県高市郡明日香村大字平田小字中尾山670-2番地他に所在する終末期古墳である。中尾山古墳については元禄10年(1697)に刊行された玉井与左衛門定時の『元禄十丁丑年山陵記録』の中で「平田村 字中尾塚 欽明帝御陵カ川石多シ」とあり、また「一 植村右衛門佐殿下高市郡平田村 欽明天皇御陵高市郡之内ニ有之哉吟味仕候様ニ被仰付候、前廉同村ヨリ字中尾塚と申出候場處御了簡ニ欽明天皇御陵所不知様ニ被爲遊候、此度見分仕候處に何様御塚之様躰御陵之様ニ相見へ申候、塚形丸ク根回三拾五間御座候、頂上東之方へ掘崩申候之様ニ窶御座候、其内ニ長四尺ニ横三尺之石御座候、根入之儀者何程トモ知レ不申候、此御塚之廻り之小石杯取申候へハ崇御座候様ニ申候、右之御塚繪圖ニ仕上候、一 右之御塚檢分之上御陵ニ茂被爲遊候者御塚之根廻り三十五間ニ垣被仰付可然様ニ奉存候、」と記されている。これによると中尾山古墳は「中尾塚」とも呼ばれ、墳丘には川原石が多く散乱していたことや墳形が丸く、墳頂から東方にかけて盗掘坑が存在しており、そこには長さ約1.2m程の天井石が露出していた様子が記されている。元文元(1736)には『大和志』が刊行され、中尾山古墳について「檜前安古岡上陵文武天皇在平田村西俗呼中尾石塚」とあり、中尾山古墳が「中尾石塚」と呼ばれ、名前からもわかるように大量の石材が散乱していた様子が窺える。また被葬者については文武天皇の名が挙げられている。安政2(1855)年に刊行された山川正宣の『山陵考畧』では文武天皇の檜前安古岡上陵について高松塚古墳と中尾山古墳のどちらかではないかと考証されている。このように中尾山古墳については江戸時代にはすでに形状は現状に近い状態であったことがわかり、被葬者についても文武天皇の檜前安古岡上陵ではないかと考証されていたことがわかる。明治26(1893)年には野淵龍潜の『大和國古墳墓取調書』が刊行され、その中で「高市郡坂合村大字平田ニ在リ中尾ト字ス中央ハ発掘セシ石窟ノ天井石露出せり是恐ラクハ玄室ノ後方ナラン乎其餘ハ破碎シ構造ノ模様ヲ知ルニ由ナシ又タ塚ノ周圍ハ勿論全山殆ント小石ヲ散敷シアリ築造ハ三段ノ圓丘ニシテ三十五六代頃ノ貴顕ノ御墓所ナラン\_ト思ハル大和志ニ\_レハ檜前安古岡上陵文武天皇在平田村西俗呼中尾石塚ト又山川正宣ノ山陵考畧ニ安古岡上陵ハ欽明陵の南ニ在檜隈村ヨリ近シ陵上ニ孤松在テ高松塚又中尾トいふト然レドモ諛御陵ハ既ニ栗原ニ御確定相成タレバ讎テ古事記ニ徴スルニ宣化天皇ノ第一の皇女ニ石姫命アリ第二ニ小石姫命アリ石姫命ハ欽明ノ大后ニテ諸陵式ニ磯長原墓トテ河内石川郡ニ在リ又タ小石姫命モ欽明ノ后トアレドモ其葬所ヲ詳ニセス依テ想フ中尾石塚トハ小石姫墓ノ誤傳ニ非ル乎本塚ハ欽明御陵ト程近ク且ツ全塚礫碌ヲ以テ満サレタルハ其御名ニ因ミシニヤアラン\_尚深く考査ヲ要ス」と記されている。ここでは中尾山古墳の墳丘が三段築成の円墳で埋葬施設は早くに盗掘に遭い石槨の天井石が露出している様子が記されている。また山全体に川原石が散乱しており、被葬者についても皇極や孝徳頃の貴人の墓と想定されている。大正3(1914)年刊行の『奈良縣史蹟勝地調査會報告書第二回』によると「中尾山ノ古墳 所在地。高市郡坂合村大字上平田村字中尾山(現今上平田村平野善六氏所有地) 俗称。中尾山ノ石塚、石ニテ圍繞セラレタルヨリ地名ヲ冠ラセシカ呼ヘルナラン。 寸法。石室ノ内法ニテ長サ約四尺一寸、幅約三尺七寸、高サ約二尺九寸五分。 構造。此墳ノ天井石ノ頂上一部露出セリ。所有者ノ談ニヨレハ、此塚上ハ約九畝二十歩餘アリテ、山ノ周圍ヲ元ハ二段ニ(又所ニヨリテハ三段)五六尺ノ自然石ニテ取り巻カレシヲ、今其多クハ氏神境内に搬ヒ去ラレタリト。サレト小石ニ至リテハ今尚處々ニ\_タトシテ存在スルヲ見レハ、思フニ此塚ハ圓墳ニシテ三段ニ築キ上ケ、石ヲ取巻ケルニアラサルカ、此





第3図 中尾山古墳位置図 (1:1000)

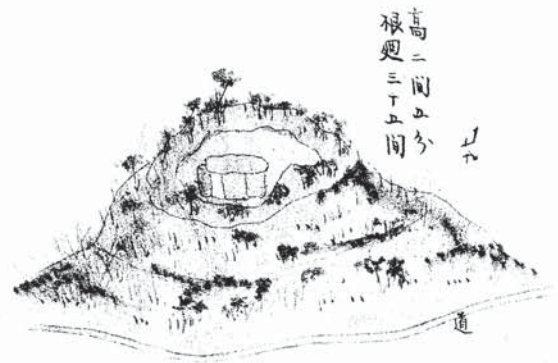


第4図 中尾山古墳周辺地籍図 (1:1000)



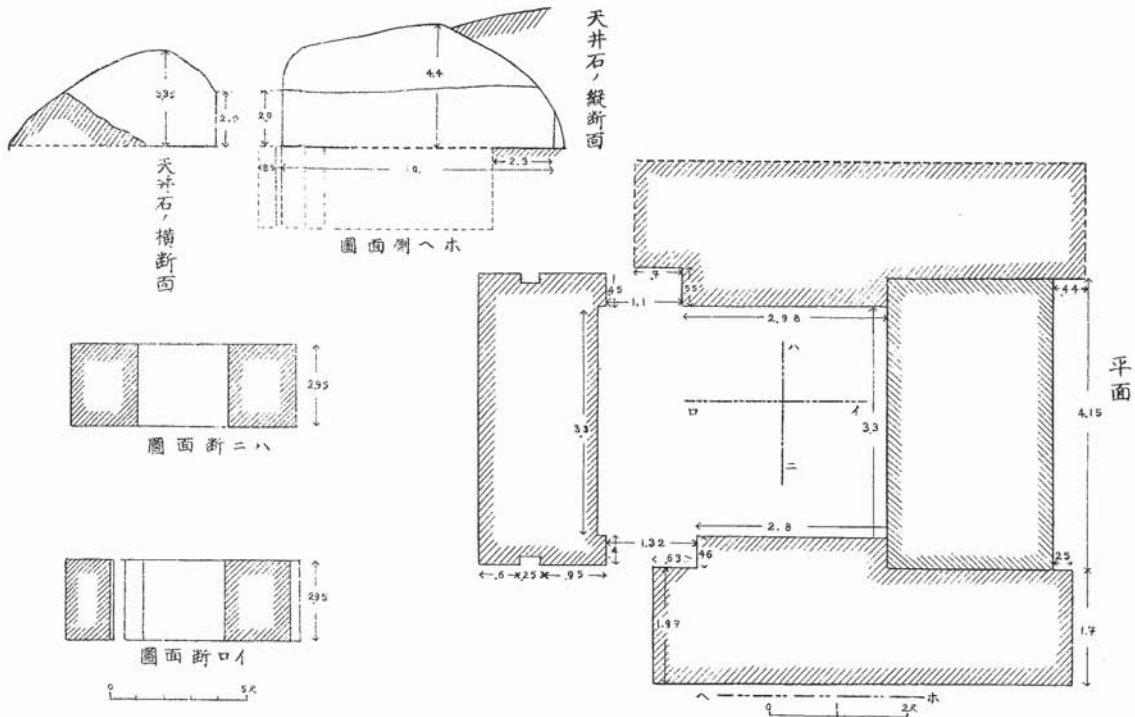
第5図 中尾山古墳位置図 (明治41年・1908年)

第五三〇  
高市郡以合村八寺平田  
字中尾山  
芝原六百七十番甲  
一山林及別九畝は九所  
民有地



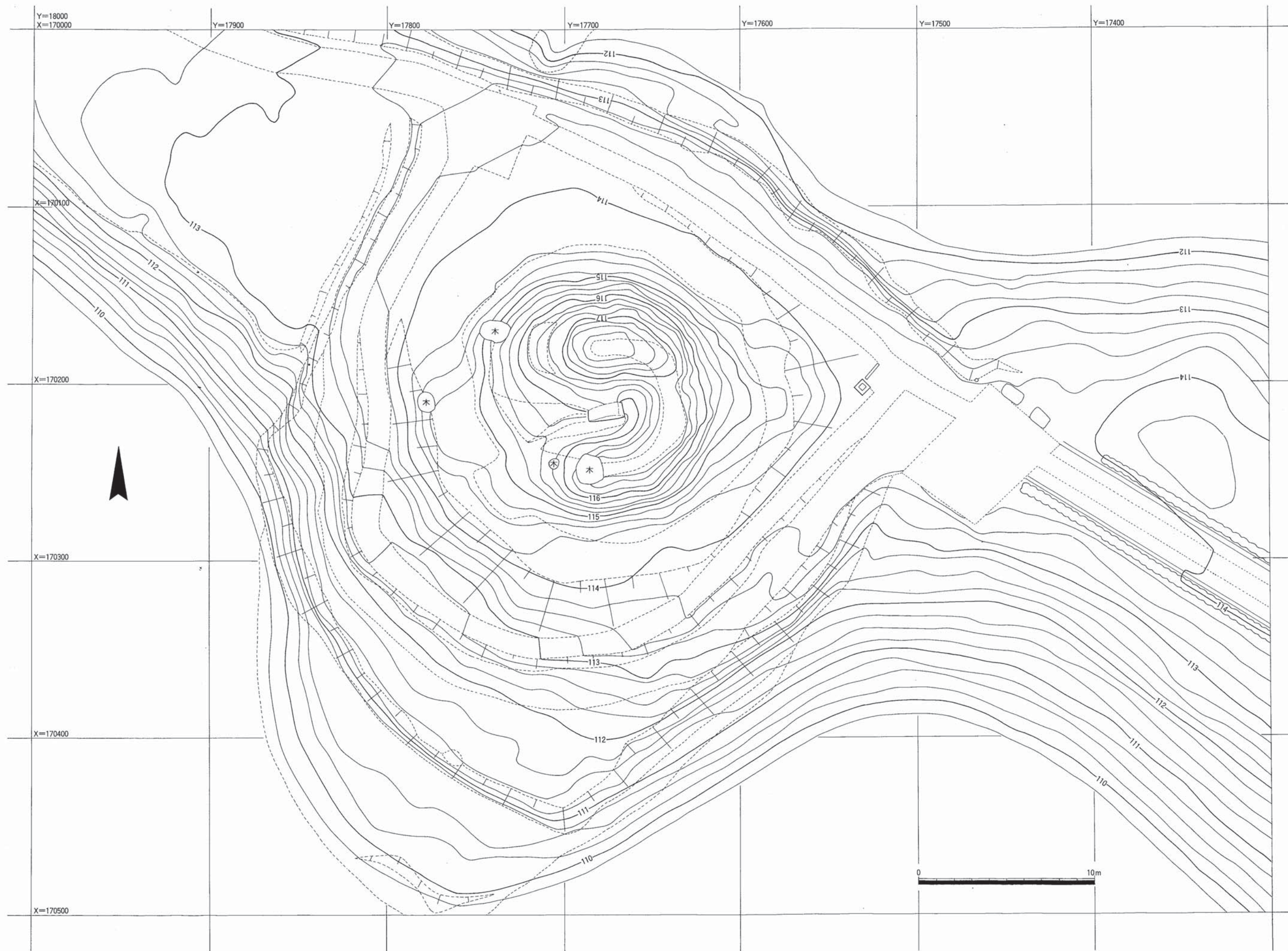
甲

第6図 『大和國古墳墓取調書』 (明治26年・1893年)



第二圖 中尾山古墳

第7図 『奈良縣史蹟勝地調査會報告書 第二回』 (大正3年・1914年)



第8図 中尾山古墳墳丘測量図 (1:200)

古墳ノ石室ハ全部花崗岩ヨリナリ、土中ニ埋没セル部分アルヨリ、能ク測定スルヲ得サルモ、天井石長サ約一丈、幅約七尺五寸、厚サ最廣キ處ニテ約四尺四寸又其最下部約高サ二尺四方ハ扁平ニ切り作ラレタリ而シテ此天井石ノ下ニ四枚ノ石ニテ石室ヲ組ミ立て平面圖ニ示セル如ク前面ノ左右各一尺一二寸ノ間隙ヲ存セルハ甚異トスヘシ今實測上ヨリ考フレハモト、東西兩壁ノ石ト南壁ノ石トヲ確ト組ミ合スヘカリシヲ、何等カノ都合ニテ豫定ノ設計ヲ變セシニアラサルカ。天井石ノ断面圖イニ見ル如ク天井石ノ北ノ下部二尺三寸南ノ處ニ石室ノ外壁終リ、其間ニ小石ノ多ク詰メ込マレタルヲ見ル。今間ニ入り覗フニ東西兩壁と北壁トノ石ノ組合ハ平面圖ノ右方ニ見ル如ク、北壁ハ嵌入セラレ、其繼キ目ニハ白ク漆喰ノ塗り付ケラレタルヲ見ル。但其面ハ粗ニシテ磨キ上ケラレス。石室ノ内面ハ、天井四壁共ニ能ク平滑ニ磨キ上ラレ、且一面ノ朱ノ塗沫セラレ今尚其殷赤色ヲ見ルヲ得。又前面（南）ノ石、左右、頂上共ニ深サ二寸五分許ノ小溝アリテ天井石ノ断面イ圖ノ如ク其溝ハ天井石（南）ノ直ク下ニ當レリ。サレト其用法ヲ知ルニ苦シム。 傳説。土人モト文武天皇ノ御陵ト稱セリ。大和志ニ「檜ノ前安古岡ノ上陵文武天皇在二平田村ノ西ニ一俗ニニ呼中尾石墓一」トアルコレナルヘシ。此石塚ハ構造上ヨリ考フレハ圓墳ニシテ火葬後ノ遺骨ヲ埋葬セシモノ、如シ。今檜前安古岡上陵ハ此塚ノ南五町許ノ坂合村大字栗原ニ確定セラレ、周圍百四十二間三分。 参考。續日本紀ニヨレハ、文武天皇ハ慶雲四年丁未夏六月十五日辛巳御年二十五ニテ崩御セラレ十一月十二日丙午飛鳥岡ニ火葬シ二十日檜隈安古山陵ニ葬リ奉ルトアリ。松下見林ハ安古岡未詳或云在平田村トシ大和志ニ前述ノ如ク此塚ヲ以テ擬ス諸陵式ニ檜前安古岡上陵ノ兆域ヲ東西三町南北三町トス。此古墳ハ兆域畧之ニ相幾シ。」と記されている。これによると墳丘は二段乃至三段で石列が取り巻き、石槨構造などから火葬墓の可能性を指摘されており、文武天皇の檜前安古岡上陵についても考証されている。大正4（1915）年刊行された『奈良縣高市郡志料』は佐藤小吉の『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』をもとにして記されたもので「中尾石塚 塚は阪合村大字平田字中尾山にあり、其の位置は欽明天皇阪合陵と文武天皇安古岡陵との略、中間にありて、見晴しよき丘上に築かれたる圓塚なりしか久しく荒廢に委して塚形頗る虧損し其の破壊せる所より夥しく砂礫の露るゝを見る。是れ往古砂礫を以て之を葺きしならん歟、古來傳へて文武天皇山陵に擬せり。現今發掘せられて石槨の一部竝に内部を窺ふを得其の構造頗る他の古墳墓に於て見る所の石槨石棺と其の制を異にせり、即ち下部に臺石を据ゑ其の上に側壁を立て更に上部より蓋石を掩へり。今其の露れたる部分に據りて測定すれば、蓋石は長九尺五寸幅七尺五寸最も厚き所四尺四寸あり、又側壁は豎に置かれたるもの厚二尺四寸横に置かれたるもの厚一尺七寸高は共に二尺九寸五分あり、而して内部の廣さは縦凡三尺横三尺三寸あり。其の石質蓋し石は花崗岩質片麻岩にして側壁と底石とは共に流紋岩質の凝灰岩にて製作せられたり。此の古墳の石槨の内部か頗る狹隘なるは蓋し当時火葬等の納骨器を斂めし制に非ざるか、其の構造の精巧なるより見れば尋常の墳墓には非ざるべく古來記録傳説共に文武天皇山陵に擬せしこと洵に故なきに非ざるなり。此の古墳墓を距る遠からざる處に字惡谷安久多仁の地あり蓋し安古谷の轉訛にして附近一帯の高地は所謂上古の安古岡ならん歟、而して現文武天皇御陵も亦此の範囲内に存在するか如し。附記して参考に資す。」と記されている。大正14(1925)には上田三平氏により石槨の実測調査が実施されている。昭和2(1927)年4月8日には内務省により史蹟に指定されている。昭和9(1934)年には島本 一氏の「中尾山古墳の石葺竝排濕溝施工に就て」(『考古学雑誌』第24卷第6号)の中で明治期の古老の聞き取りなどから中尾山古墳の排水施設について言及し、墳丘内暗渠の存在や構築技術について検証されている。更に昭和11年に島本 一氏は「中尾山古墳に

就いて」(『考古学雑誌』第26巻第10号)の中で横口式石槨の封鎖方法や墳丘内暗渠の存在、さらに後に沓石と呼ばれる石材について中尾山古墳の構築技術などを総合的に考察されている。昭和45(1970)年には藤井利章氏の「晩期古墳の基礎的考察」(『龍谷史壇第66・67合併号』)が発表され、中尾山古墳の墳丘の測量調査の成果をもとに墳丘が二段築成の八角形を呈することや北側には馬蹄形の空漕の存在などについて言及されている。昭和49～50年にかけて環境整備事業の一環として発掘調査が実施された。調査の結果、墳丘は直径約19mの八角形墳で周囲には八角形状に二重の石敷きの存在が確認された。この石敷きを含めた規模は対辺約30mに復元されている。埋葬施設については南に開口する一辺約0.9m四方の横口式石槨で、壁面には朱が塗布されていることも明らかとなった。昭和50(1975)年2月には発掘成果をもとに環境整備が実施され、園路や解説板の設置などが行われ、同年3月末に竣工し、現在に至っている。

(西光慎治)

## 2、測量調査報告

中尾山古墳は竜門山系から派生する尾根の先端から更に南東から北西に伸びる低位丘陵上に位置している。墳丘はこの丘陵の稜線からやや南に張り出した部分に築かれている。墳丘は現状では標高114.250mを墳裾と考えると直径約15mの円形を呈しており、墳頂との比高差は約4mを測る。墳丘斜面には拳大程度の川原石が散在している。また、墳丘西側から石槨の天井石付近にかけて盗掘を受けており、それに伴う排土が標高115.000m～114.250mにかけて堆積している。このため墳丘は「コノ字」状を呈しており、北側の現墳頂は117.973mとなる。更に墳丘の東側の標高115.250m～114.250mにかけて舌状に張り出している。墳丘北側から北東側と南東側から南側にかけては比較的良好に残存しており、ここでは標高116.250m～115.000mにかけて墳丘のコーナー部分を示す屈曲するコンターラインを四ヶ所確認することができる。さらに墳丘裾部から標高113.750m～112.000mにかけて幅約2.0m～7.0mのテラス面が存在する。この部分は現在歩行者用通路が設けられており、高さは約0.25m～1.00mを測る。また墳丘の南西側には標高113.500m～112.000mにかけて「コの字」状の張り出しが存在することから墳丘前面にテラス面を伴っていた可能性が考えられる。このように中尾山古墳の墳丘を復元すると、墳丘は終末期古墳特有の腰高であり、全面に葺石を施した八角形を呈していたことがわかる。墳丘裾の平坦面を含めた範囲で墳丘を復元すると対辺の距離は約30mとなる。

(辰巳俊輔)

### 【引用・参考文献】

野淵龍潜1893 【大和國古墳墓取調書】

奈良縣1913 【奈良縣史蹟勝地調査會報告書】第二回

高市郡役所1915 【奈良縣高市郡志料】

高市郡役所1915 【高市郡古墳誌】

上田三平1927 【奈良縣における史蹟指定】第1冊

島本 一1934 「中尾山古墳の石葺竝排濕溝施工について」『考古学雑誌』第24巻第録6号 考古學會

島本 一1936 「中尾山古墳に就いて―封鎖に関する觀察―」『考古学雑誌』第26巻第10号 考古學會

藤井利章1973 「晩期古墳の基礎的考察」『龍谷史壇』第66・67合併号 龍谷史学会

明日香村教育委員会1975 【史跡中尾山古墳環境整備事業報告書】

### 第3節 豊年橋石碑実測調査報告

#### 1、はじめに

豊年橋は奈良県高市郡明日香村大字越と大字平田の境界を南北に流れる高取川に架構されている橋である。現在の橋は国道169号線の改修に伴い昭和36年に架け替えられたものである。

大正4年に刊行された『奈良縣高市郡志料』によると「豊年阪合村大字平田同越の間にあり、高取川に架せる石橋にして長約三間幅五尺あり。相傳ふ高取川大雨至る毎に水漲る、里人渡渉に艱む越の人服部宗賢資を投して石橋を架す。此の年五穀大に稔す、皆稱して豊年橋と名く、碑あり勒して云ふ。ほうねん橋」と記されている。これによると豊年橋は長さ約5.4m、幅約0.9mで江戸時代に度重なる高取川の増水により村人が苦心していたところを服部宗賢が私財を投じて石橋を完成させたことがわかる。この服部宗賢は宝暦2（1752）年に現在の明日香村大字越で誕生し、15歳で京都へ出て畑黄山・小野蘭山に医術を学び、後に高取無藩主植村家長の侍医となる。文政3（1820）年1月18日死去。享年69歳。墓所は明日香村大字越の称念寺にある。

豊年橋については隣接してある石碑によると「ほうねん橋 寛政八年丙辰秋九月橋成」と刻まれており、また豊年橋に架けられていた石材を転用したとされる石碑にも「寛政八年丙辰願主越村□」とあり、服部宗賢44歳の時に豊年橋が完成していたことがわかる。今回、豊年橋の石碑を実測する機会を得たので報告を行う。  
(西光慎治)

#### 2、実測調査報告

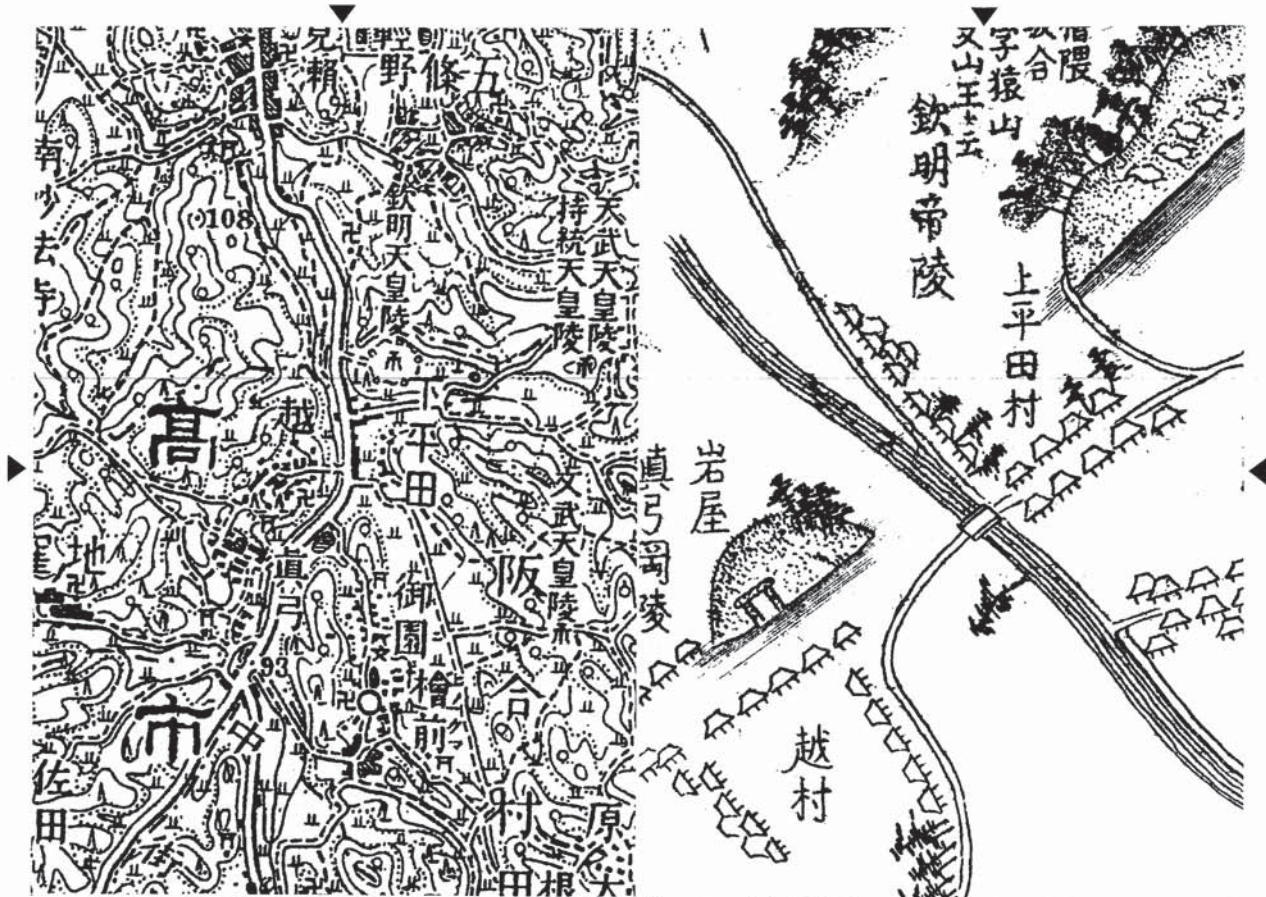
豊年橋に使用されていたとされる石材は二石残存しており、ひとつは豊年橋の石碑（1）として、もうひとつは豊年橋から北へ約80mにある「榎竜神」を祀る石碑（2）に使用されている。次に各石材の概要について述べる。

- (1) 材質は石英閃緑岩で長辺2.15m以上、短辺1.95m、厚さ約0.46mを測る。碑名が刻まれている面は精微に加工されている。石材の短部にはL字状の切り込みが施されている。この切り込みは一方の短辺側だけで残りの面には確認できない。裏面は加工痕が明瞭に残存している。
- (2) 材質は石英閃緑岩で長辺1.8m以上、短辺1m、厚さ約0.32mを測る。碑名側は平滑で精緻であるのに対して裏面は中央に向かって削りとられている。短部に切り込み等の加工は認められない。  
(西光慎治)

#### 【引用・参考文献】

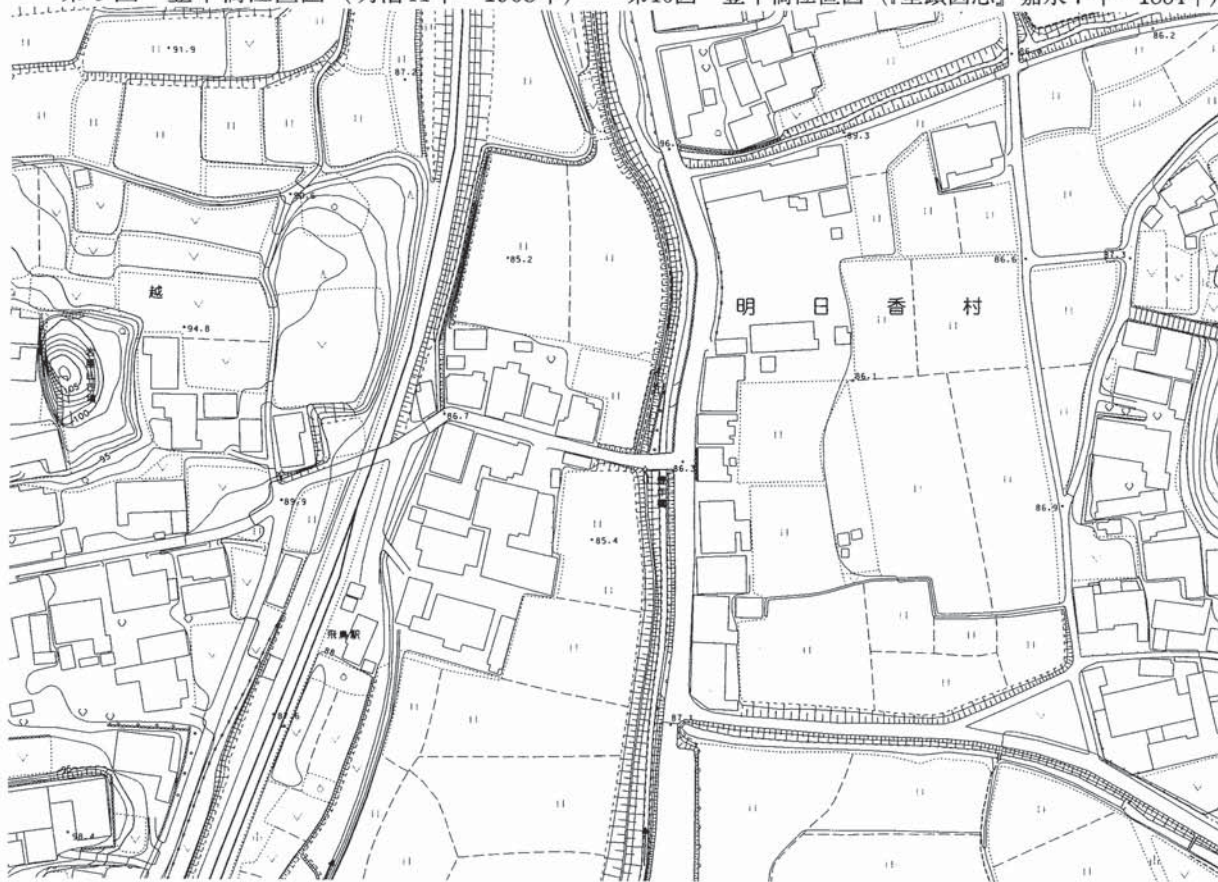
高市郡役所1915 『高市郡志料』

明日香村1974 『明日香村史』下巻

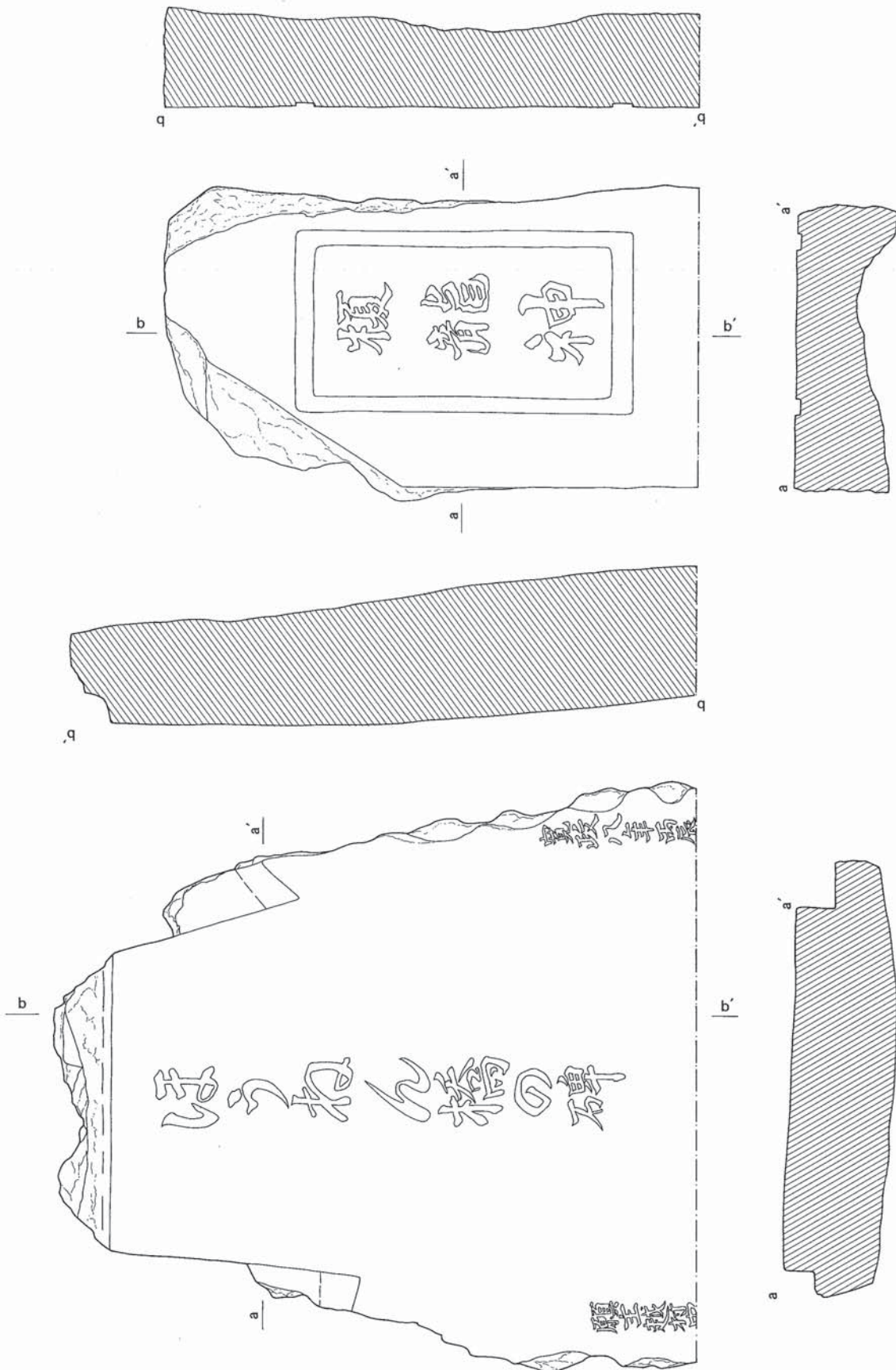


第9図 豊年橋位置図 (明治41年・1908年)

第10図 豊年橋位置図 (『聖蹟図志』嘉永7年・1854年)



第11図 豊年橋位置図 (1:1000)



第12図 旧豊年橋 転用石碑 実測図



## 第Ⅳ章 総括

今回は中尾山古墳と豊年橋の石碑について調査を実施することができた。中尾山古墳については昭和49～50年にかけて発掘調査が実施されており、八角形墳であったことが確認されている。今回の測量調査も発掘調査後の墳丘測量調査となり、現況を把握することを目的として実施したものである。豊年橋の石碑についてはこれまで岩屋山古墳の羨道の天井石であるとか、横口式石槨の転用であるなどの諸説がだされていた。実際、岩屋山古墳の羨道の天井石と考えた場合、いわゆる「岩屋山式」の横穴式石室については羨道天井石の南端は墳丘斜面に沿って斜めに加工されており、それより先は天井石を架構しないのが通例で、岩屋山古墳の場合、羨道の天井石は完存しており、転用されたとは考えられない。また横口式石槨の一部と考えた場合、削り貫き式横口式石槨の床石に相当すると考えられるが現状では側壁をうける切り込みの段が短辺にしかなく、短辺の最大幅が約2 mとこれまで確認されている横口式石槨の内法の幅よりも広い。仮にこの石材を積極的に横口式石槨の床石と評価した場合、短辺の切り込みの段のある最小幅が約1 mを測り、長辺も台座部分(約60cm)が埋め込まれていると考えると長辺が2.6m前後となり横口式石槨の内法の規模に近くなる。石碑の上部は現状では両端はハの字状に斜めに割れていることから、製作途中で放棄された未完成品であった可能性も考えておきたい。このように明日香村内には多くの後・終末期古墳や古墳に関連するとされる石材が存在している。しかし、こういった資料も資料化されていないものも少なくない。また、明日香村内の後・終末期古墳の多くも昭和40～50年代にかけて発掘調査や測量調査が実施されたものである。当時の成果は飛鳥地域の後・終末期古墳を考える上で重要であることはいうまでもないが、近年の古墳を取り巻く環境の変化は時代の流れとともに少しずつ変化してきており、こういった中、現在の古墳の状況を把握し、資料化しておくことで今後、飛鳥地域の後・終末期古墳の研究や保存対策等を検討する上でたたき台になれば幸いである。

(西光慎治)

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	おうりょうのちいきしけんきゅう						
書 名	王陵の地域史研究						
副 書 名	飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅳ						
巻 次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編 者 名	西光慎治編						
著 者 名	西光慎治、辰巳俊輔						
編 集 機 関	明日香村教育委員会事務局文化財課						
所 在 地	〒634-0103 奈良県高市郡明日香村大字川原91-3番地 TEL0744-54-5600 FAX0744-54-5602						
発行年月日	西暦2010(平成22)年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
中尾山古墳	奈良県高市郡明日香村 大字平田小字中尾山	29402-1	17-A-165	34°27'51"	135°48'21"	200908～ 201001	学術
旧豊年橋	奈良県高市郡明日香村 大字越・平田	29402-1	—	34°27'56"	135°47'56"	201001	学術
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
中尾山古墳	古墳	飛鳥時代	八角形墳、横口式 石槨	—		—	
豊年橋		—	—	—		—	